

## 腹腔鏡手術

### 腹腔鏡手術を習熟した医師が QOLに配慮した治療を提供

肝臓・胆道・膵臓を含む消化器のがんや難治性疾患から逆流性食道炎、虫垂炎、痔疾、肥満症まで、幅広く診療する同院の消化器外科。特に腹腔鏡手術では、術後のQOL(生活の質)に配慮。習熟した医師が診療することに加え、平成29年には4K内視鏡手術室が設置され、一層精度の高い治療が可能となった。

2018年1月には手術支援ロボットを先進のバージョンに更新。消化器外科でも今後活用していく予定だという



消化器外科部長

### 瀧口 修司先生

1991年大阪大学医学部卒業。2017年4月から現職。名古屋市立大学大学院消化器外科学教授。特に上部消化管の内視鏡手術を専門としており、努力を惜しまず技術を磨き、常にベストな手術をめざしている。

#### 幅

広い疾患を取り扱う消化器外科だが、部長である瀧口修司先生を筆頭として腹腔鏡手術に精通・習熟した医師が多数そろっていることが大きな特色だ。消化管がんの手術後は多少なりとも生活への影響が避けられないものだが、できる限り、治療後のQOLへの影響が少ない手術方法を選択して「います」と瀧口先生。

「同じ胃がんの手術でも、可能であるならば、胃をすべて摘出するのではなくほんの少しだけでも胃の上部を温存しています。そうすると食欲に関係するグレリンというホルモンが失われないので、生活への影響が少なくて済みます」

体への負担だけでなく、手術を受ける患者とその家族の心情にもこまやかな配慮をし、治療の選択肢を提示していく。その後の人生を左右しかねないことだからこそ心配りだ。

がんの手術は、がん細胞を残らず取り切る根治性の追求と、臓器の機能を温存してQOLを保つことを両立させることは難しいが、低侵襲な内視鏡手術の進歩によってそれが実現可能となってきたという。一般的な施設において、胃がんで腹腔鏡手術が選択されるのは全症例の5割程度といわれているが、同院では約9割を腹腔鏡下で手術している。また食道がんでは、胸に数力所の穴を開けて行う胸腔鏡による切除術を積極的に取り入れ、患者の負担を軽減。開胸手術での食道がん切除に比べて、出血や術後の痛み

を抑えられるだけでなく、術後の肺炎発生リスクも低くなり、早い回復が期待できるそうだ。

長年、腹腔鏡手術に携わってきた瀧口先生は、腹腔鏡手術は低侵襲であるだけでなく、患部の細かい部分まで拡大して鮮明に見ながら進めるため、経験を重ねた医師が行えば、精度の高い手術がより安全に実施できる方法だと思えます」と強調する。

同科では平成29年、手術精度をさらに高めるため、4K内視鏡システムを備えた手術室を設置。デジタルハイビジョンをはるかに超える画素数を持つ4Kシステム活用のため、薬剤による細胞染色で、これまで見えなかったような微細ながん細胞を見えるようにする検査方法も採用した。また、消化器がんのロボット支援手術開始に向け準備を進めている。

「医師は常に患者さんのために何ができるかを追求する心が大事ですが、当院の医師はその視点を持ち、どんな患者さんにも紳士的で優しく丁寧に接すると自負しています。看護師らスタッフとのチームワークも非常にいいですね。当科には胃がんや食道がんなどの、直接命に関わるような病気を診るイメージがあるかもしれませんが、ヘルニアや虫垂炎なども広く診ています。そのためか、市民との距離の近さを感じることも多くうれしい限りです。これからも市民にとって気軽に受診でき、先端的な医療を安心して受けられる存在であり続けたいです」